資料１

令和５年度 少年自然の家事業の評価と課題

１　受け入れ事業

○　今年度の利用実数は、１月末現在（統計による数字は以下同じ）において、７，５３２人である。昨年度の同時期と比較して２，３４６人増加した。

全体の研修者数（延べ人数）は、１２，３５３人である。昨年と比較して６，３６１人の増である。また、受入れ団体数は２７３団体であり、昨年と比較して２２団体増加している。

今年度の実績を令和４年度と比較すると、全ての項目で増加している。これは、コロナ禍による利用者側の宿泊研修の自粛や当所における休所措置がなくなったためであり、回復傾向を示している。(令和５年５月８日から新型コロナウイルス感染症が感染症法上の位置付けが５類感染症に移行)

一方で、新型コロナウイルス感染拡大前で影響がほぼなかった年度（令和元年度）と比べると、利用実数は約５，４００人の減である。また、研修者数は約９，７００人、受入れ団体数は６３団体減少している。つまり、利用が回復傾向ではあるが、まだ、完全に以前のような利用が戻っていない、またはコロナ禍を機に研修が形を変えて実施されているとも考えられる。

利用実数	令和４年度と比べ １４５％の人数	➡	令和元年度と比べ ５８％の人数
研修者数（延べ人数）	令和４年度と比べ ２０６％の人数	➡	令和元年度と比べ ５６％の人数
受入れ団体数	令和４年度と比べ １０９％の人数	➡	令和元年度と比べ ８１％の人数

また、今年度研修者数が減少しているその他の要因として、次の３点があげられる。

①　全ての学校を受け入れるために１泊２日の研修を依頼した。(調整後に２泊３日への変更も可能としたが、２泊３日で研修を組んだ学校は３校にとどまった。)

②　感染症拡大防止による学級閉鎖などの措置によりキャンセルになった団体があった。

③　一団体（学校）あたりの児童・生徒数が減少した。(表４)

○　学校種別利用実数については、小学校に関しては宿泊研修の団体数６１校で昨年度同期に比べて１１団体増えている。また、令和元年度と比べても１校のみの減少であり、小学校に関しては、コロナ禍以前の状況に戻ってきたことが伺える。(キャンセルを含めると同数である)

○　学校団体に関しては、学校のニーズの多様化、個々の児童に対して配慮を要するケースも増加している。研修の充実や事故防止の面からも研修支援の内容や方法について学校担当者との事前の打合わせや当日の緊密な連携が大切になってきている。そこで、今年度も研修プログラムごとの「打合せ資料」をもとに、開始３０分前に研修スタッフと学校担当者と話し合いの場を持った。研修期間を通して団体の研修のねらいを達成するために大切なこの打合せは、自然の家ならではの支援の一つである。こうした関りがあるからこそ、入所団体のねらいの達成度や研修の満足度が高くなると感じている。団体の担当者からは打合せが煩瑣であるというような声は聞かれないが、学校側の立場に立ち、打合せの簡略化など、今後に向けた、よりよい支援方法を探っていく必要がある。

○　救急を要する事故等については、重大な事故は発生しなかったが、６月に自然の家、敷地内でのクマの目撃例があった。内規に従って目撃後３日間は野外での活動を中止した。入所団体には代替えのアクティビティを提供し安全対策を図った上で活動してもらった。

一方で、県の鳥獣対策専門員に助言をもらい、クマを寄せない工夫（においが発生するものを断つ、クマが好む植物の所在場所を把握する等)、クマに出会わない工夫(クマ鈴の準備、クマの痕跡の調査）を施した。また、万が一の事態に備え、クマ撃退スプレーも準備した。

同時に入所者へ“クマに出会わないために”“クマに出会ってしまったら”という視点でオリエンテーション時にポイントを伝えるようにした。

５～９月までにマダニに噛まれる事例が数件発生した。いずれも草の深いところに入っていないことから枯葉に潜んでいた可能性があり、活動後の対処や確認の大切さを入所時に伝えるようにした。

２　主催事業　※詳細は、各主催事業報告書（資料３）に記載

○　主催事業については、今年度も①子どもたちの「生きる力」を育む、②家族（親子）の絆を深める、③ボランティア養成を図る、④青少年社会教育施設での野外体験活動機会の充実を図る、⑤施設の利用拡大を図る、という５つの視点からなる１５の事業を計画した。今年度は、クマの目撃情報や天候の影響により予定を変更したこともあったが、全ての事業を実施することができた。ここでは、①と②について特化して報告する。

○　子どもたちの「生きる力」を育むことをねらいに据えた『子ども対象事業』として、「ジュニア・サマー・キャンプ」、「子ども探検隊」、「かわいい子には旅をさせよう」、「ジュニア・ウインター・キャンプ」を設定した。５泊６日の事業「ジュニア・サマー・キャンプ」、冬季のケビン宿泊等を伴う「ジュニア・ウインター・キャンプ」では途中に各々の思いの相違からトラブルも発生した。しかし、最終的にそのトラブルを乗り越えたからこそ、退所時により強い参加者間のきずなを深めたり、達成感を味わったりすることができた。トラブルが起こることを想定しながら、その中で参加者が考える場面を設定すること、最後には解決につなげていくことは、これからの時代を生きていく力を育むためにも特に大切にしたい視点であると感じた。

「子ども探検隊」「かわいい子には旅をさせよう」では一貫してテーマ（ねらい）を合言葉として意識づけていった。「自分一人でできること」を大切にした「かわいい子どもには旅をさせよう」では炊飯活動をすることで自分の苦手な食べ物が好きになったと発表した子どもがいた。また、事業後に布団敷きや食事の準備などを自分でするようになった子どもが見られるなど成果が見られた。何よりも２日間で気持ちや行動を変えることができる子どもたちの素晴らしさを感じるとともに、変化を生み出す事業のプログラムデザインの重要性を感じた。

○　家族・親子の交流、家族間の交流をねらいに据えた『親子・家族対象事業』として、「家族ではじめよう！キャンプ講座」「ミニ・キャンプ」、「チャレンジ・ザ・サマー」、「森と海のつどい」を設定した。

これらの事業は昨年までコロナ禍のため、家族内での交流が中心であった。今年度は、感染対策を図りながら家族間交流が生まれるように小グループでの活動を設定した。子どもが仲良くなるに連れ、保護者同士の会話も弾んだ。退所時には写真を撮ったり、連絡先を交換したりする姿も見られた。メディアのない中で親子や家族間で楽しみを創り出しながら過ごすという事業の意義を感じることができた。

３　その他（今年度のトピックス）

○　イモームズの結成【自然の家ボランティアチーム】

中学生５名、高校生１名、大学生１２名、合計１８名

初めは、職員から依頼されたことについて説明をしたり、手助けをしたりするなどの支援が多く見られた。次第に、参加している子どもにとって何が必要かを考えて寄り添いながら支援するといった関わりの変化がみられた。お互いが刺激を受けながらよりよい関わりができるようになってきた。

○　新プログラム（障がい者スポーツ）のスタート【車いすバスケットボール体験】

１４団体のべ３０２名…利用団体指導者研修会　校長会などの広報による効果

オリジナルルールを考えさせるなど、誰もが安心して楽しむことができることを大切にした。障がい者スポーツの普及に終始せず、インクルーシブ教育につなげるように団体担当者との打合わせを密にした。

○　関連団体との結びつき【主催事業：「オープンデー」でのブース出展】

グラントワ、しまね自然子育てネットワーク、島根県キャンプ協会他　５団体

新たな結びつきが生まれた事業となった。今後、事業を展開するために他団体との連携・協働は欠かせないことであるので、地道に外部団体へアプローチする必要がある。今回、実現はしていないがその他の団体とも可能性を探って協議した。

○　研修の充実【野外における緊急対応研修・野外活動安全管理研修】

利用者が野外活動中に負傷したことを想定した実地研修を行った。それぞれが役割を分担した上で訓練をし、振り返りの中で課題を洗い出すことで、万が一の時に備えた。

野外活動安全管理研修は、野外アスレチックコースを有する他施設を訪問し、安全管理の様子を見て当所の安全管理の在り方を見つめなおすために計画した。しかし、今年度は荒天のため中止となった。

４　今後の課題

○　利用促進

学校の現状は教職員の働き方改革、学習時間の確保、保護者への負担軽減などがあり、宿泊を伴う体験学習にとって逆風を感じることがある。しかし、その中でも当所を利用したいという気持ちになるように次のことを進めていく。

- 教育的な価値を確かなものにしていく。（計画段階からの関わりを大切にする）
- 魅力的なプログラム・新規のアクティビティの開発
- 閑散期の利用促進（他団体との関係づくりと PR）
- 効果的な広報・広報の工夫
  （SNS を活用したタイムリーな広報、チラシ等を使った効果的な広報）

○　地域を含めた各種団体との関係づくり

江津市（民）の自然の家の認知度、利用度を向上させる必要がある。そのためにも所外に出て、各種団体との関係をつくっていくことを大切にしたい。江津市内、または近隣の市町の社会教育施設・学校へ訪問し、具体的な入所につなげる。または、連携・協働による事業参加への提案を行う。可能な範囲で他団体の事業へ協力できないか検討していく。

○　安全管理

安全で安心して、思い切り活動できるよう環境を整えていくことが求められている。動植物（クマ、ハチ、マダニ）、気象状況（熱中症、落雷）について職員で研修を続け、自然体験活動のプロとして正しく利用者に情報を提供していきたい。また、緊急対応マニュアルを見直していく。

○　体験活動の一層の促進

子どもたちが置かれている状況を考えた時、体験活動の不足は加速されている。今だからこそ、体験活動の意味について考え、主催事業においては原体験（その後の生き方や考え方に大きな影響を与える体験）を組み入れたプログラムを大切にする必要がある。

○　温かい空気の中でのフォローアップ体制

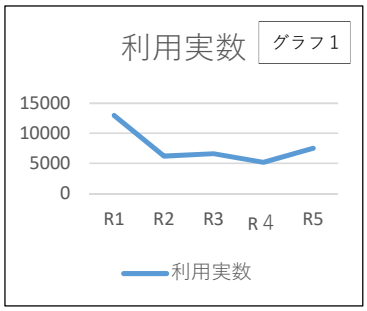
当所のよき風土の一つに、役割を超えながらフォローしていく体制が整っていることがあげられる。この温かい空気が流れる中だからこそ、よりよい教育活動が実践されていると感じる。これは一人の力ではなく、組織の力だと感じる。この空気をチームで保っていけるように、些細なことでも話し合える雰囲気を作り、課や役割を超えてフォローし合える組織でありたい。

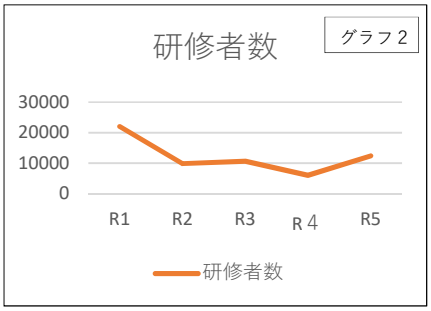
（文責：河本誠二）

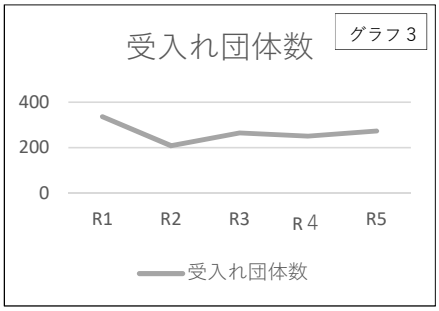
過去5年間の利用実数・研修者数・受入れ団体数（1月末 ※以降各年度1月末の数字）

表1

	R1	R2	R3	R４	R5	前年比	R1年比
利用実数	12981	6236	6611	5187	7532	145%	58%
研修者数	22011	9854	10647	5992	12353	206%	56%
受入れ団体数	336	209	265	251	273	109%	81%



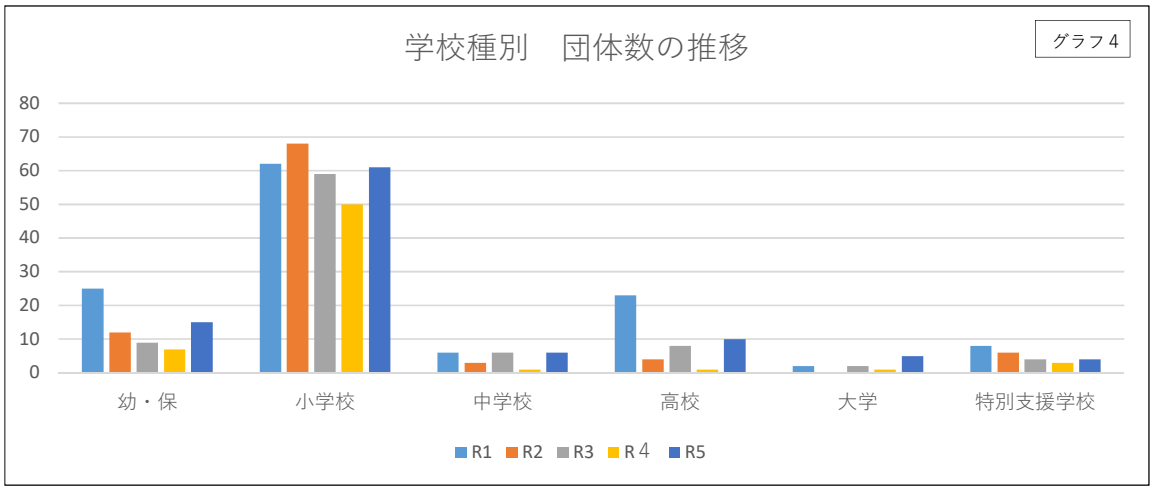




過去5年間の学校種別団体数（1月末）

表２

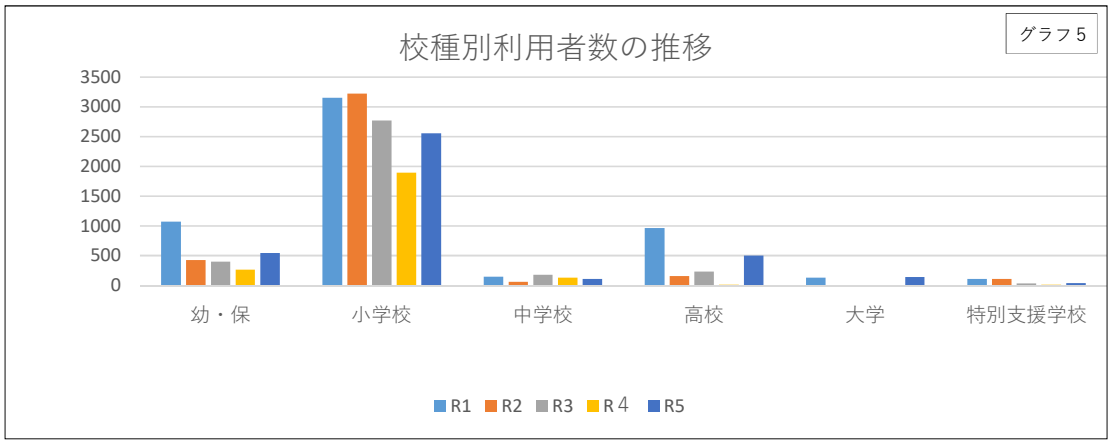
	R1	R2	R3	R４	R5	前年比	R1年比
幼・保	25	12	9	7	15	214%	60%
小学校	62	68	59	50	61	122%	98%
中学校	6	3	6	1	6	600%	100%
高校	23	4	8	1	10	1000%	43%
大学	2	0	2	1	5	500%	250%
特別支援学校	8	6	4	3	4	133%	50%



過去5年間の学校種別利用者数(1月末)

表３

	R1	R2	R3	R４	R5	前年比	R1年比
幼・保	1069	431	404	266	547	206%	51%
小学校	3154	3220	2773	1893	2556	135%	81%
中学校	148	63	182	130	108	83%	73%
高校	962	158	236	14	504	3600%	52%
大学	133	0	11	0	141		106%
特別支援学校	109	111	32	13	42	323%	39%



1団体当たりの利用者数(利用実数)(1月末)

表４

	R1	R2	R3	R４	R5
幼・保	42.8	35.9	44.9	38.0	36.5
小学校	50.9	47.4	47.0	37.9	41.9
中学校	24.7	21.0	30.3	130.0	18.0
高校	41.8	39.5	29.5	14.0	50.4
大学	66.5	0.0	5.5	0.0	28.2
特別支援学校	13.6	18.5	8.0	4.3	10.5